みんなの
ための
学校長会に

茨城県 学校長会広報

第233号
発行者
茨城県学校長会
会長　坂場　克身
事務局
〒311-1125
水戸市大場町933－1
教育プラザいばらき内
☎ 029－269－1300
FAX 029－269－1304

特集

特色ある学校経営
行財政・調査研究委員会の要望や取組
先輩と語る会

目次

○表紙写真に寄せて……1
○特色ある学校経営……2
○行財政・調査研究委員会の要望や取組……6
○課題「「面倒なこと」に慣れる」……7
○先輩と語る会……8
○創意工夫を生かした特色ある教育課程……11
○市町村教育委員会と学校長会……13
○特別寄稿・図書案内……14
○梅のかおり……15
○ひばり……17

団結力の育成に向けて

茨城町立青葉中学校　林　豊夫

本校は、平成二六年四月に桜丘中と梅香中が統合してできた二年目の新しい学校である。

「青葉中の伝統づくりに向けて」を課題に掲げ、日々教育活動に取り組んでいる。その取組の一つとして、団結力を高めるために、体育祭の全競技において、六つの縦割り団対抗としている。団長を中心とした三年生が一、二年生をリードし、団員をまとめていく。この三年生の取組の様子を下級生が引き継いでいくことで伝統となり、学校全体の団結力にもつながっていくものと考えている。

特色ある学校経営

特集1

地域に信頼され、魅力ある学校づくりを目指して
～体力つくり・地域との連携を軸に～

水戸・見川小　小林　圭

一　はじめに

本校は、水戸市のほぼ中央部に位置する。昭和時代後半より宅地化が進み、多数の商業施設や団地・マンション・住宅が建ち並び、市内でも人口密集地帯の学校の一つである。現在の児童数は、五二八名、二〇学級（特支三学級含）である。保護者や地域の学校に対する思いや関心は極めて高い。学区は狭く、ほぼ全児童が徒歩二〇分以内の通学圏に居住している。スポーツ少年団に所属している児童はいるものの、地域に広場や遊び場が少なく、外で遊ぶ経験が少ない。このため、児童の基礎体力が低く、体力テストでは、特に「反復横跳び」「シャトルラン」「ボール投げ」の数値が低い傾向にあった。また、子供会の組織率が低く、地域住民との結びつきも低い。生活状況調査では、「地域の行事に参加した経験」のある児童も市内では最も低い割合であった。

学校は、児童の実態や保護者や地域の願いを受け止め、求める児童の育成に向け、学校内外の資源や能力を最大限に活用し具現化を図っていく必要がある。昨年度から「子供たちに笑顔を！～明るく楽しい学校づくり～」のスローガンのもと、児童の体力つくりと地域との連携を重点の一つに経営を進めている。

二　体力向上に向けた取組

ア　昨年度より週一回業間体育を行っている。各学年の体力を補うための「ローテーション運動」、持久走大会に向けた「五分間走」、なわとび大会に向けた「短なわ・八の字跳び」を実施した。安全面・運動量確保の観点から全校を二グループに分けて、全職員で取り組む体制を作り実施している。

五～九月　ローテーション運動
十・十一月　五分間走
十二月　ローテーション運動
一・二月　縄跳び運動
三月　ローテーション運動

〈ローテーション運動の内容〉
①八秒間走
②おもいっきりボール（ネットを挟んで相手コートにお手玉を投げ合う）
③バトンスロー
④ターゲットボール（段ボールを積み上げた的めがけてハンドボールを投げる）
⑤サーキット走

〈サーキット走の内容〉
①サイドステップタッチ
②コーン走
③ケンパー
④ゴム跳び
⑤動物歩き・前回り
⑥平均台
⑦ぐねぐねロープ渡り

イ　陸上朝練習〈五・六年〉
六月より、始業前二〇分間、五・六年希望者を対象に実施

三　地域との連携強化に向けた取組

ア「ゆかりの桜」花見会
本校校庭の光圀公のお手植えと伝えられる「ゆかりの桜」のライトアップを地域住民と共催で実施

イ「ゆかりの桜」キャラクターの公募、着ぐるみの製作

ウ　地域ふれあい祭りへの参加
地域のふれあい祭りを住民と共催し、全校児童で参加している。児童の特技発表コーナー、高齢者から学ぶ昔遊びコーナー、各種模擬店などを設け、保護者と共に参加

エ　地域人材による学習支援
「紅白梅図屏風」（レプリカ）の鑑賞会・「茶の湯」体験等

四　おわりに

児童の実態をもとに、「体力つくり」と「地域との連携」を重点の一つにして取り組んできた。この結果、体力テストでは、A＋Bの児童の割合が、二年連続六〇％を越え、一昨年度より二〇％以上アップし、県から「体力つくり奨励賞」の表彰を受けた。また、児童や保護者のアンケートで、「ものごとを最後までやりとげてうれしかった。」「今住んでいる地域の行事に参加している。」「子供は楽しく学校生活を送っている。」と回答した割合は、大きく上昇した。

今、多くの児童は、生活にメリハリができ、学力面でもよい結果が出てきている。児童の実態をもとに、学校内外の教育資源を生かした学校経営の一つの成果と考えている。

夢を育む魅力ある学校を目指して

常陸太田・幸久小　星　良一

幸久小学校は、常陸太田市南部の水田地帯に位置し、近くには久慈川が流れるなど自然豊かな環境の中に位置している。現在の在籍児童は、八一名と少なく、年々減少傾向にある。三世代家族が多く、保護者は共働きが多い。地域の学校へ対する関心は高く、大変協力的である。児童は、素直で明るく伸び伸びとしている。学区内には路線バスがなく、児童のほとんどは、徒歩で通学している。中には、一時間近くかけて歩いてくる児童もいる。

本校は永年、緑化活動に取り組んできたが、更にその活動を含め、様々な体験を通して「人に温かく、勇気と自信をもって進んで行動できる子供の育成」を目指し取り組んでいる。

一　少人数学級のよさを生かした授業改善

本校の課題である「自分の考えを自信をもって伝える」ことができるようにするため、国語科を中心に児童が単元や一単位時間の授業の流れを見通せるような授業の改善に取り組んでいる。書く活動や話し合い活動を通して相手にわかりやすく伝え、自分の考えとの共通点や相違点を意識しながら考えを深めていくことのできる表現力の向上を目指している。更に、国語科で培った表現力を児童が他の学習活動や学校生活の場で生かし、活用することができるようにするために、支援の方法や工夫についても全職員で継続的に取り組んでいる。取組の主な内容は、次のとおりである。

○国語科を中心とした単元計画を明確にした授業設定と改善

○「単元を貫く言語活動」における国語科の学習過程について、思考力・判断力・表現力を高めるための学び合い学習の活性化

○言語を基盤とした多様な表現方法の習得への支援

二　緑化活動の推進

児童自らが植物を育て、愛する心を培う活動や体験を通して、自己有用感を高め、自分に自信をもたせ主体的に実践できる児童を育成している。

①校内

○学級花壇

アサガオ、サルビア、マリーゴールド、アゲラタム

○一人一プランター

マリーゴールドを種から育てる。

○学級菜園（野菜づくり）

スイカ、キュウリ、トマト、さつまいも、ゴーヤ

②校外（環境委員会の児童たちの活動）

○JR河合駅花壇への花の苗定植

○花の苗を植えたプランター寄贈

学区内グループホーム、JA幸久支店、太田警察署、駅前交番

○町内花壇用苗の寄贈

○三年生による鳥追い小屋づくり（総合的な学習の時間）

学校緑化活動から地域の緑化活動へと活動の幅を広げて取り組んできた結果、児童の心に植物や地域に対する愛着心が芽生え、自己有用感を高めることができた。緑化活動は、今後も継続して取り組んでいきたい。

三　地域との連携協力

毎日の登下校時における見守りや運動会などの学校行事への協力などが積極的に行われ、学校・家庭・地域の協力体制が構築されている地域である。教育に対する理解や関心が高く、公民館や町内会との交流も盛んである。「地域の宝」である子供たちの健全な成長を願い、防災訓練など地域の行事に学校と連携したり、協力したりして積極的に取り組んでいる地域である。この地域の特性を踏まえ、各学年において地域の人材や昔から伝わる伝統的な物づくりなどを教材として積極的に活用し、地域のすばらしさを体験させている。

今後も、これまでの実績を基に学校・家庭・地域が連携し、子供たちの夢をはぐくみ、地域の学校として誇れる魅力ある幸久小学校を目指していきたい。

一人一人が生き生きと輝き、活力に満ちた生徒の育成を目指して

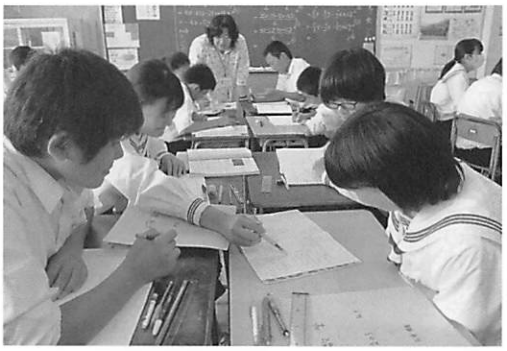
鹿嶋・大野中　濵内　宏

本校は、鹿嶋市の北部に位置し、東に鹿島灘、西は北浦に面した自然に恵まれた地域である。本年度「明るく、楽しく、活力があり、連帯感のある職場づくり」「信頼され、地域に根ざした特色ある学校づくり」を学校経営の重点に掲げ、「ヘッドワーク・チームワーク・ネットワーク・フットワーク」を合言葉として取り組んでいる。

一　主体的・協働的な学習の展開による「分かる喜び」「できる喜び」の保証

①　鹿嶋市授業改善プロジェクト実践協力校

思考力・判断力・表現力を高める授業改善が図られるよう、全教科において授業研究を行い、その成果を検証している。その中で、鹿嶋市学力



向上スーパーバイザー（井上一郎先生）より授業改善に係る指導・助言を受けながら、授業力向上を図るとともに、実践協力校として、授業を公開している。また、PWC（P：ポイント、W：ワーク、C：チェック）シートを活用した教科共通の学習シートの開発を行っている。

② 中学校理科新教材活用モデル校

いばらき理科教育推進事業の新教材の活用による授業研究を推進するとともに、その成果を県内に広めることを通して、理科教員の指導力の向上を目指している。

二　生徒の活動が見える特別活動の展開

① 生徒の主体性・創造性を生かす活動

生徒会活動の活性化を図り、学校生活に関する諸問題の解決に取り組み、互いに協力して改善向上を図ろうとする実践力を育てている。また、各種行事（体育祭、入学式、卒業式等）において、生徒の活躍の機会を与え、自己肯定感等を高める機会としている。

② 同名校「いわき市立大野中学校」との交流活動

「いわき市立大野中学校」との交流（募金活動、運動部の交流試合等）を通して、生徒が人とのかかわりの大切さを実感し、自分たちの生活をよりよくしていくとともに、自分たちの地域を大切にしていこうとする心を育む機会としている。

三　学校運営に積極的に参画する教職員

① おおのパワーアップ大作戦

平成二二年度より、中学校区内の幼保小中で連携し、子供たちの学力の向上・規律ある生活の確立を目指している。本年度は、地域の方々や保護者にも呼びかけ「みんなの学校」の上映会を開き、共に教育について考える機会とした。さらに、組織体制の見直しを図り、六つの組織（幼保小連携・小小連携・小中連携・豊かな心育成連携・教育支援連携・健康体力アップ連携）で連携強化を図っている。

四　家庭や地域の理解と協力の推進

① 大野地区フォーラム

生徒、保護者、教職員、さらに地域の方々が集い、学校に関わる様々な問題について意見を交換することを通し、家庭・地域の教育力と学校が一体となって、活力に満ちた生徒を育成するためにどうすればよいかを考える機会としている。

② 地域への積極的な情報発信

学校だよりを生徒家庭だけでなく、まちづくりセンターへの掲示及び各地区の回覧を通して学校の情報を知らせている。また、ホームページの更新を繰り返し行い、最新の学校の情報を発信するよう心がけている。

学びの共同体としての学校づくり
～学び合い、支え合い、育ち合う学校をめざして～

石岡・国府中　四宮　雅人

国府中学校は、石岡駅周辺の商業地域の南端に位置する、生徒数一六〇名の小規模校である。

今年度から「授業づくり＝学校づくり」という経営哲学の下に、「学びの共同体」としての学校づくりを開始した。平成一八年七月の中教審答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」には「～学年主任等が他の教員を指導する機能が低下するなど、学びの共同体としての学校の機能（同僚性）が十分発揮されていない～」と記載されている。国府中では、この「学びの共同体」の実践軸を次の三点とし、年間を通した授業実践研究のための指針としている。

一　授業の改善

一斉授業から脱却するために、そして、生徒の学びを保証していくために、生徒全員を授業に参加させる工夫された手立てを講じる。「聴き合う関係」を構築し、男女四人グループの協同的な学びを組織する。教え合う関係ではなく、支え合い学び合う関係を築く。質の高い課題を工夫し、ジャンプのある学びを提供する。

（グループ学習の様子をVTRと聞き取りで詳細に記録していく。）

二　同僚性の構築

全ての教師に教育の専門家として成長する機会をつくる。そのために、全ての教師が年一回以上同僚に授業を公開し、VTR撮影した生徒の学ぶ姿から「事実」を基に全員が発言し、対話を通して考察をする。その際、若手・ベテラン・管理職の区別をなくす。そして、教科の壁を越えるために、生徒の学びの状況（活動・協同・表現）の三要素を共通の話題とする。つまり、教科の専門的内容についての話題よりも、その授業を参観して「学んだこと」を語り合う。どんな授業からでも学ぶことはあるという考え方を浸透させる。

三　保護者の学習参加

授業参観から授業参加へ改善し、授業を子供とともに構築する。教師と保護者が授業において協力し連帯関係を築く。これは実践の難しい部分であるが、保護者が授業の手伝いに入っている事例は多い。その部分を拡大していくことで、より授業への理解を深め、信頼関係を築くことが可能になる。

これらの中で、特に重要視していることは、日々の授業を「学校（校長）として」どう責任をもつかである。授業は担任や教

科担当者に任せておけばよいものではない。日々質の高い授業を提供できる教師（組織）をつくることが学校の責任である。授業ほど高度な知見と専門的教養を必要とする営みはない。そのような授業を行っていくためには、学校が組織一丸となって授業づくりに取り組むことが最優先事項になる。

次に、教師には二つの課題がある。**一つめは「反省的実践家としての教師」二つめは「専門家としての教師」**に成長することである。国府中では「反省的実践家」としての教師育成を当面の課題としている。これについては、授業者の人数分の授業公開と省察を継続して行うことで収穫を得られることが、過去の実践から確信をもつことができた。

五年後にせまった学習指導要領の改訂には、「アクティブ・ラーニング」の文字が躍っているが、本校では活動的で協同的な学びとして、すでに研修を始めている。次世代を担う若手教師のさらなる成長と授業実践力の向上がねらいである。

最後に、中学校で年間二〇回以上の授業づくり研修を実践することは、簡単なことではない。また、校内研修を授業研究に特化させることも同様である。そこに、確固たるビジョンが必要であることは言うまでもないが、「学びの共同体」としての学校づくりを目指し、生徒・教師・保護者が三位一体となって学校の使命と責任を果たしていけるように努力していきたい。

心豊かに　たくましく　かしこい児童の育成を目指して

桜川・坂戸小　萩谷　和昭

筑波山を臨む自然豊かな地域に位置した本校は、明治六年に創立し、平成二七年度に開校一四二年を迎える歴史と伝統のある学校である。学区が広いため、通学方法はバス、自転車、徒歩と様々である。児童数一五六名の小規模校であるが、児童は素直で明るく、休み時間は異学年と遊ぶ姿がよく見られる。

また、地域の方々の学校に寄せる期待は大きく、学校に協力的な土地柄でもある。

本校の教育目標は「心豊かにたくましく生きていく　かしこい児童の育成」である。この目標を具現化するにあたり、感謝と思いやりの心を育むことを本校教育の要として、教育活動に取り組んでいる。

一　小中連携の取組

昨年度より中学校区三校が連携し、義務教育九年間の見通しのもと、目指す児童・生徒像について話し合い、児童生徒の視線に立った、円滑かつ一貫性のある教育活動を推進している。

今年度も、年間四回の研修を実施していく。特に八月の研修は三校教職員が一同に集まり、学力向上・生徒指導・不登校・家庭との連携の四分科会に分かれ協議している。この研修会を通して各校間の共通理解が図れ、合同の取組を推進している。また、二月に反省と次年度の取組について協議している。

○今年度の取組

三校合同で同一期間に「ノーメディア」「無言清掃」「早寝早起き　朝ごはん」を各学期に実施している。

○中学生の協力

毎月の中学生による朝のあいさつ運動や中学生サポーターによる学びの広場を実施している。

二　学校支援ボランティアによる授業活性化への取組

ボランティア活動を積極的に学校活動に取り入れることで、地域の教育力を生かした豊かな体験活動の充実を図っている。

○組織づくり

毎年四月当初に、地域にボランティアの協力依頼を行い、現在ボランティア会員は約三〇名登録していただいている。

○主な活動

ボランティア総会（五月と二月に実施）、図書室の本の整備、校庭の樹木の剪定、ミシンやそろばん指導、学校行事や校外学習の付き添い、朝の交通安全立哨指導、運動会のダンス指導など、多岐にわたる。

三　学力向上に向けた取組

教員の指導力の向上を図るためにも校内研修の充実は重要である。本校は、「国語・理科における言語活動の充実」を目指し、一人一研究授業、ワークショップ型の研究協議を実施している。この他に、学力向上に向けた次の施策に取り組んでいる。

○少人数指導

少人数加配教員が配置され、算数において児童を等質の二クラスに分けて行っている。さらに、六月より管理職も加わり複数の教員によるTTを取り入れた少人数指導も行っている。

○高学年理科担任制

茨城県教育委員会より、小学校理科担任制モデル事業の指定を受け、理科主任が五年生の授業は単独で、六年生の授業は担任とのTTで行っている。

四　豊かな心を育む取組

朝は担任が教室でじっくりと児童と関わり合うことが豊かな心を育む上でも大切であると考え、朝会等をなくした。また、次のような取組を実践している。

○ロング昼休み（週一で設定）

四〇分間のロング昼休みを設置し、児童との触れ合いを進めている。また、縦割り班活動や集会等を行っている。

○誕生者紹介

お昼の放送時に毎月、誕生者紹介と担任による祝いのメッセージ紹介さらに担任外によるプレゼント曲を放送している。

○朝のあいさつ運動

毎朝、管理職及び生徒指導主事等によるあいさつ運動を実施している。

今後も「子供たちのために」を合言葉に日々、チームで児童の夢の実現に向けた学校経営に取り組んでいく。

特集2　行財政・調査研究委員会の要望や取組

平成二八年度「教育行政に関する要望」―その概要と経過―

行財政委員長　住谷　正己

〈要望の概要〉

詳細は要望書をご覧ください。

Ⅰ国への要望

○義務教育標準法の改正に伴う教職員定数の改善及び加配数の増

○小学校第二学年以降への「三五人学級」の拡充、早期実現

Ⅱ県への要望

今年度も調査研究委員会と連携し、「少人数指導教育」「教職員定数」「教育環境等」に関する調査を実施し、結果について分析と考察を行いました。

一　きめ細やかで質の高い教育を子供たちに保障するために

㈠　少人数学級並びに少人数指導にかかわること

①「楽しく学ぶ学級づくり事業（小一～六）」の継続

②「中学校生活スタート支援事業（中一）」の継続と中三までの事業拡大

③「安定した学級・良好な人間関係・教師のきめ細やかな指導」が可能となる少人数指導のための加配措置の拡充

㈡　確かな学力の育成にかかわること

①　小学校における学びの広場サポートプラン事業の継続

②　中学校における学びの広場サポートプラン事業の継続

二　学校組織の充実と活性化を図るために

㈠　新規採用にかかわること

①　新規採用者の計画的・継続的な増員による小・中学校の欠員の最少化

②　講師経験者の実績を十分に加味した採用枠の更なる拡大

㈡　人事による活性化にかかわること

①　学校の実態に応じた教務主任の定数外配置及び小学校専科指導加配教員の増員

②　バランスのとれた教職員の配置

③　特別支援教育について専門性の高い教員の配置

④　再任用の在り方の改善と充実

⑤　専門的・補助的スタッフの配置

三　充実した教職生活の実現のために

㈠　管理職の待遇改善にかかわること（省略）

㈡　教職員の勤務時間管理と健康管理にかかわること（省略）

㈢　教職員の育成にかかわること（省略）

四　本県教育の一層の充実・発展を図るための市町村当局への助言について（省略）

〈要望書作成の経過〉

6月8日～全小中学校への調査Ⅰ～Ⅲ（県の教育情報ネットワークの活用）

6月25日～アンケート調査結果の集約、分析、考察

7月16日　県校長会役員等との要望書内容の検討

〈要望行動の経過〉

7月30日　常任評議員研修会で要望書案の説明

8月4日　要望書に関する義務教育課との事前協議

8月26日　県教育庁への要望書の提出

9月10日　第二回評議員研修会で要望書への回答報告

〈今後の取組〉

昨年度末に実施した少人数学級の学力と生徒指導面の課題等に関する調査を継続します。二～三月に実施する予定ですので、ご協力をお願いします。

調査研究委員会の取組

調査研究委員長　石井　誠二

Ⅰ活動のねらい

本県学校教育の現状や直面している課題等の調査を通して、県学校長会が、その解決に向けた提言・活動等を行うための資料を提供するとともに、各学校の特色ある教育活動の推進の一助とする。

Ⅱ具体的な活動と進捗状況

三部会に分かれ、次の四つの活動を行っている。

一　今日的諸課題に関する調査と研究（第一部会）

○行財政委員会と連携を図り、主に「教育環境」に関する調査を実施し、県への要望書作成のための資料に資する。

○進捗状況

・6／8調査依頼

・6／17アンケート集約

課題

「面倒なこと」に慣れる

県学校長会副会長　倉持　利之
（坂東・岩井中）

五〇年ほど前の私の実体験。当時の岩井町立七重小学校（現坂東市立）の先生方は、学校あげて算数科の研究に取り組んでいらっしゃった。算数の時間になると黒板が見えないほど参観の先生方が教室を埋め尽くしていた。参観の先生方に色々と質問されたり、ノートを見られたりしたのを覚えている。算数の時間は、いつもそんなイメージであった。

また、五年生の時に茨城大学で開催される「第二回計算能力競技大会」に選抜チームとして参加することになった。第一回優勝校として何としても優勝しなければならない雰囲気が子供心にも伝わってきた。親たちは夜食を準備して先生方や子どもたちをバックアップした。だから自分たちはやるしかなかった。というよりもそれが当たり前であった。ひたすら計算問題を早く正確に解くスキルを競うものであった。第三回大会からは、文章問題も入ってきた。団体で連続優勝、個人でも一位から三位までを独占したのを覚えている。

高校二年の時に、数学の試験で初めて百点をとった。自分でも驚いた。担当の先生も大いに褒めてくれた。数学が好きになり、数学の面白さにはまり始めた。お陰で文系・理系の選択で大いに悩んだが、小学校から社会科が好きだったこともあり、大学は社会と数学ができる経済学部に進んだ。

今年度末で教職三八年間が終わる。小学校、中学校（社会）、行政と様々な職種に携わらせていただいた。小学校の時の体験が、人間形成にどんな影響を与えたのか振り返ってみた。

「面倒なことに慣れた」というフレーズが一番に浮かんでくる。とにかく、理屈抜きに計算問題や文章問題に、そして算数の授業に取り組んだ。何桁ものかけ算や割り算をこなし、多様な文章問題に当たり前のように接することで、どんな複雑な問題でも面倒がらずに挑戦すれば必ず希望の光が見えるということを学んだ。

労働経済学者の玄田有史は、「大きな壁にぶつかったときに大切なことはただ一つ。壁の前でちゃんとウロウロしていることだ」と言う。超えられない壁に直面したときうずくまっていないで、その前でうろつくこと。穴を見つけたり誰かが見つけてくれるかもしれない。「希望は、無駄とか損とかいう計算の向こうに見つかったりするものだ」とも言っている。

教育は国家百年の大計。半世紀過ぎた今でも鮮明に残っていることから、学校教育の根幹である「一時間一時間の授業」は教科の学習内容の習得と同時に人間形成の大切な部分を担っているということを身をもって感じている私である。

恩師に感謝。

・7月　考察（行財政委員会と合同）
・8／26　要望書提出

二　特色ある教育活動の調査（第二部会）

○各小中学校の研究・研修の充実発展に資することを目的に調査を実施し、結果を「教育プラザいばらき」webページに掲載する。

○進捗状況
・6／29　調査依頼
・7／17　アンケート集約
・7月　考察
・8月　webページ作成
・9／1　webページ掲載

三　勤務実態に関する調査（第三部会）

○年間二回（六月・十月）に実態調査を実施する。

○調査内容
・調査内容区分における該当者数及び各学校の平均超過勤務時間数

四　全連小・全日中等の調査協力

○全連小各種委員会の調査
・標準法　・施設設備教材等
・教員養成・給与年金
・教育改革・教育課程
・現職教育・特別支援教育
・健全育成

○中学校教育に関する調査

Ⅲ六月に実施した勤務実態に関する調査結果の概要

県内の小学校五二一校、中学校二二一校、教職員一五八四九名に協力いただいた。

○小学校における超過勤務時間の傾向は、八〇時間未満が八四・三％、八〇時間以上一〇〇時間未満が一二・九％、一〇〇時間以上勤務した職員は二・八％であった。

○小学校における平均超過勤務時間を県全体で平均すると五五・五時間となった。小学校における平均超過勤務時間は、昨年度では平均が五二・五時間だったことから、今年度の県全体平均超過勤務時間数は約五％増えた。

○中学校における平均超過勤務時間を県全体で平均すると、九〇・三時間となった。昨年度の調査は、八六・二時間だったことから、今年度の県全体平均超過勤務時間数は約四・五％増えた。

○小中学校を学校規模で分けた超過勤務時間数を見ると、学校規模が大きくなるほど超過勤務する職員の割合が多かった。

○勤務実態調査は十月も実施する。特に、超過勤務時間の主な業務内容について調査を実施し、業務の効率化に資するようにしたい。

特集3 先輩と語る会

八月四日 教育プラザいばらき

今年度は、一四名の先輩校長の皆様にご出席いただき、「道徳の教科化をめぐって」「子供と向き合う時間の確保のために」の二点をテーマに話し合いをしていただきました。

※ゴシックは先輩校長

【第一分散会】

・まずは、一つ目の視点「道徳の教科化をめぐって」について、御意見をいただきたい。

・「本音で語り合い、自己の生き方について考えを深める」ということも学校教育指導方針に書かれているが、本音で語り合っても、それで終わってしまっている。人としてあるべき姿、なすべき行動にまで掘り下げられないまま、授業が終わってしまっているという現状がある。

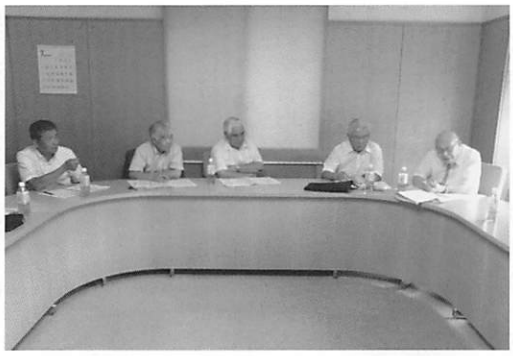
○なぜ、道徳の教科化が出てきたのか。先の教育改革において「生きる力」が中心課題となった背景には、愛知の大河内君自殺事件がある。また、今回の教育改革も大津事件が背景にある。教育改革の背景にはいじめの問題があり、それを解決するための道徳教育とも言えるのではないか。

○いじめ問題を考えた場合、当事者（担任や子供たち）だけで解決することは無理であり、学校の体制や学校長の責任は重い。そのことに対して、校長（会）のなすべきことは重要である。

・校長として、どのようにいじめ問題に取り組んでいけばよいでしょうか。

○いじめは当然起こるもの。どう見付け、どう対処し、どう解決していくかが重要であるが、言えない状況があるとすれば、それは校長にも責任がある。

○いじめ問題がなぜ起こるか。それは、他を思いやる心、他の痛みを感じる心の欠如があるから。しかし、それを育てるのは、道徳の時間だけではない。日常を、実態をどう捉えているのか、どう見ているのか。大切なのは日常である。



○いかにして子供が人間として自己を確立しくのか。学校教育が立ち向かっていくべきことであり、各学校がしっかり取り組んでいくべきことである。

○教員の感性の欠如を感じる場面がある。感性は日頃の実践から育つものであり、その延長線上に道徳がある。校長としても普段から教員や子供と接し、日常を見回り、日常をどう変えていくのかが重要である。

○校長が、どうこの問題を捉えるか。子供の成長保証は校長としての当然の任務である。最先端に立って努力してほしい。いじめの第一発見者が校長であるという経営をしたい。

○なぜ教科化されたのか。その背景を勉強することが重要。子供の心に寄り添い、どう育てていくのかである。

○躾の問題とともに、年齢に応じた、教わるのではなく社会の事象に目を向けた自分たちで考える道徳でなければならない。

・次に二つ目の視点「子供たちと向き合う時間の確保について」御意見をいただきたい。

○文科省「チーム学校」の推進における、地域連携担当教職員の配置については、社教主事を学校に配置する等、組織的な取組が必要。

○忙しい原因を取り除かないと教育効果は期待できない。勤務時間内で終わる学校をつくりたい。

○教員という職種の特殊性がある。長時間働くという長年の習慣ができてしまっている。どこかで思い切って断ち切る努力をしないと変わらない。

・今の学校現場では、社会的要請も多くなっており、SCやSSWを中心とした支援員の配置等の、物理的な対応がないと厳しい現実がある。

・子供の登下校時刻を考えると既に超過勤務になっているのが現状。一方で、生活習慣のように流れで残っている者もいる。地域社会を見ながらも学校が抱え込まない工夫等も必要。

○地域から見た「良い先生」として、いつでもそこにいて対応してくれる「おらが先生」というイメージがある。また、教員にも自負がある。

○一点突破。取捨選択や軽重を付けることもある意味必要。

○校長が勤務実態を把握し、個別に対応していくことが、考えるきっかけにもなる。

○校長自身がアイディアをもち、仕掛けてみる。何人かの教員が気付けば違ってくる。

○子供と接する時間と授業の準備。これは学校として、忙しくても除けないものである。

○学校は今、一番やりたいこと、やるべきことができなくなってきているという現状について、あきらめずに訴え、各学校ではなく、校長会全体として地域や社会に流れを起こす動きをしていってはどうだろう。

《先輩出席者》
永山　宏昭 様　大泊　信雄 様
梅原　勤 様　佐藤　和夫 様
東小川昌夫 様
《学校長会出席者》
井坂　武　倉持　利之
勝村　登　深見　晋
五十野亀久雄　住谷　正己
川井　洋子　橋本　清文

【第二分散会】

・道徳の教科化に対するお考えや御意見をいただきたい。

○なぜ教科化なのか？大事にするというだけならば、今でも大事にしている。その違いは、もっと道徳性を大切にしようということだろう。算数のように答えが明確なものとは違う。本来見えないものを見えるようにする難しさがある。教員の資質向上にはつながると思う。

・評価の問題がある。内面をどう評価するのか？数値的な評価はできない。混乱をきたす恐れがある。評価について御意見をいただきたい。

○校長会としてどう取り組んでいくのか、予想される問題や課題は何かを現場の先生方から聞かせてもらいたい。

・道徳は週一時間しかない。小中学校によって実態は違う。多忙の中で道徳の授業が埋没している。一方、資料開発をして充実した授業を実践してきた人もいる。モラルの低下がみられ、誰もが心の育成の重要性を実感している。今までは、長いスパンで捉えてきたものが、現在は、すぐに見える形で成果を求められるようになってきた。

○道徳の教科化となれば、保護者等の道徳を見る目が違ってくる。すぐに成果が求められる。今までは、すぐに実践化できなくても、将来において道徳心が育っていればいいという考えだった。文科省などは今までの経緯を理解しているのか？また、道徳の評価は、教員のさらなる負担になる。本音で言えば、評価のマニュアルを作ることも必要かもしれない。

○親は、教科化になると熱くなる。かまえて準備をしておく必要がある。校長会は、茨城代表として中央に実践者の声を届けていく必要がある。

○もうひとつの課題として、今までの副読本や個人の自作資料はどうなるのか、教科書とのバランスはどうなるのか等を早急に議論する必要がある。

・評価の問題が見えてこない。先行実施している学校の中には数値で表している学校もある。また、子供はどんどん変容する。どの時点で評価するのかという問題もある。文科省も明確な結論は出していない。

○国の目指す方向が出てくるだろうから、整合性をつけていく必要がある。

○寺門光輝先生が「貪・瞋・癡（とん・じん・ち）」（仏教において克服すべきものとされる最も根本的な三つの煩悩のこと）についてお話をされており、人間の本性とは激しいものであるとのことであった。今は激しい本性も大人になったら変化する可能性があるとすれば、よさを認める評価が根底にあると思われる。型にはめた人間をつくるような評価にならないか危惧している。

○いじめや自殺をなくすための教科化なら考えが浅い。学習したことを評価するのか、人格全体を評価するのか難しい。教科ならば、学習内容を評価する必要がある。心情的評価は難しい。

・教科化の流れは法規上から出たことなので変わらない。具体的にどうやるかを議論している。

○国の方向性が出てきたら、校長会はどう対応するのか考えておく必要がある。

・子供たちと向き合う時間の確保について、お考えや御意見をいただきたい。

○内部からの意識改革が必要だ。思い切ってやるためには、校長のリーダーシップが欠かせない。学校のもっている負担感は「チーム学校」が実現すれば軽減できるかもしれない。そのような体制を作っていくことが大切だ。財務省は少子化に伴い教員数を削減しようとしているが、子供一人一人に目がいく体制を作るには、定数改善を強く訴えていくことが必要だ。教育にもっと予算をかけてもらいたい。自殺予防の最大効果は、定数改善にあると考える。

・定数改善を訴えるためには、少人数の効果をもっと明確にするべきだ。少人数指導に関する調査結果からは、有意性が見えてこないので、現在アンケート内容の検討をしている。

○小学校では、一日中子供に対応している。この大変さが伝わっていない。全連小・全日中にも強く訴えていく必要がある。

○小学校の英語教育も免許のない教員には負担だ。専門の教員を配置しないで「やれ」と言うだけではできない。

・文科省は教科型の英語には専門的なスタッフを配置すると言っているが、現実には無理だ。「チーム学校」にして、専門スタッフを増員する代わりに教員を減らす可能性もある。

○ＯＥＣＤの調査で、文科省は日本の教育予算は最下位と言っているが、財務省は一人当たりについては平均並みと言っている。福井県では、経産省からの原子力関係の予算を入れて、教職員定数一〇四％を達成している。今回の資料の専門スタッフの予算はどこから出るのか。

○効率化とはいっても中身は変わっていない。教員が余裕をもてる環境づくりが大切だ。教員の意識改革、行政や地域への要望など対応を真剣に考えないと教員の勢いも出てこない。

○超過勤務に対して産業医の面接・指導は徹底しているのか？

・実態より低い数値を報告している可能性がある。校長会の調査では、月一〇〇時間超のはずだ。負担感としては、保護者対応に時間がかかっている。調査・報告は減っているはずだ。

○調査・報告については、結果がどうなったかを発信することが大切だ。いろいろな組織（ＰＴＡ等）と連携して要望をしていく必要がある。退職校長会も活用してほしい。

第二分散会

《先輩出席者》

大山　睦様　田崎　光紀様

鯨岡　武様　砂川　洋一様

《学校長会出席者》

坂場　克身　錦織　俊雄

菊池　芳治　沼田祐一郎

小池　義寿　大髙　美子

磯崎　則男　吉川　明宏

足達　幸子

【第三分散会】

・道徳の教科化について、一番の課題は、評価についてである。今まで道徳的な評価は、通信票の行動生活の欄で、学校生活全般を踏まえて行ってきた。今度、教科となる道徳の時間の中でも評価するとなると、その整合性が危惧される。

○今までの道徳の指導は、道徳の時間を中心に全般的なものを合わせて道徳性を伸ばすものだった。道徳の時間だけでの評価では、狭くなってしまう。

・道徳の時間をなぜ何のために教科にしたのか。文科省は教科化の際、学校間や教師間の差を課題として指摘している。

○指導者の差は現実的に大きいものがある。道徳の時間が本当に深化できるものになっているか、今までの道徳の時間の在り方を反省し、現実を捉えて取り組むことも必要である。教科になっても、道徳の目指す本質は変わらない。議論に押されて、制度が次々に変えられている点が問題だ。

○道徳の時間は、道徳的価値についての内面化を図る時間だから、価値の葛藤場面などを明確に設定すべきである。そうすれば評価がし易くなる。価値について真摯に向き合ったかどうか、アンケートやノート等色々な方法で評価できるだろう。

・道徳の評価についても、総合的な学習の時間の評価のように、個人の良いところを文章に表すようになると思う。教科化を追い風にして、現場を変えていこうという向きもある。

○反省は十分にして、道徳の時間が学校行事や他の教科に化けたりしないようしたい。また、かつての道徳教育の指導法の研究や資料の開発に取り組んだ熱意を無駄にせず、これからも一年に一つでも自作教材開発などに取り組んでほしい。

○薩摩の教育「詮議」のように、「起きうることにどう対処するか」ということを、子供たちに具体的に話し合わせてはどうか。そういうことが問題解決的な学習などに結び付くと思う。

○道徳こそ生まれてすぐ始める家庭の教育である。教育基本法に家庭の教育的責任が明記されている。家庭と一緒に道徳教育を進めていくことが大切だ。

○幼児教育、就学前教育についても親の責任について考え、学校だけが責任をもつという視点を改善しなければならない。

○家庭教育の在り方まで学校が変えていこうという意気込みが必要だ。積極的に授業を公開したり、保護者を巻き込んだ道徳の時間にしたり、色々工夫してほしい。体験的・問題解決的な学習については、本来の道徳の時間とは、別な方向に行くことが懸念される。道徳的価値の追求を念頭に置き、今後取り組んでいくことが大切である。

○大津の事件は、道徳教育推進校で起きた。今回、道徳の教科化に向けて一斉にスタートしたときに、子供たちとのすれ違いが生じないか心配している。

・次に子供と向き合う時間の確保のために、何かアドバイス等意見をいただきたい。

○スリム化の舵取り役の管理職はアンテナを高くし、目を見開く必要がある。子供や保護者のニーズと教職員を守ることなどのバランス感覚が大事である。

○生徒指導等の対応で、家庭の問題をすべて学校が背負っているという現状がある。学校に荷を背負わせる、またそうせざるを得ない状況を改善していかなければならない。

○いじめによる自殺も学校に一因があるが、家庭の原因も多い。保護者教育、家庭改善も必要だ。学校が安易に譲歩や謝罪をする現状もある。学校の存在理由は、学力の向上と人間性の涵養の二つである。それには教師と生徒が向き合う時間が無くてはならない。子供と向き合う時間の確保は根本であり、最初に行うべきことである。

○教員にとって何が多忙と感じるのか検討すべきである。子供と向き合うのは一日の大半を占める授業である。一人一人と向き合うための授業の改善が必要である。校長は率先して子供たちと遊んでほしい。それを先生方や地域の方々も見ている。

○学力の向上は人間を変える。子供は学力が高まることを願って学校に来ている。これに応えてやり、努力させることが、いじめ等をなくす要因である。

○子供たちの内面をつかもうと日記指導を夢中で行っていた時期があった。日記へのコメントを書いている時、「先生何やっているの」と子供がそばに寄って来た。その際、やるべき本当に大切なことは、その子と向き合って話してやることだった。そう気付いた苦い経験がある。本当に大事なことを自覚してやっていれば、学力も生徒指導も効果が上がってくる。

○現実問題として、作品募集など依頼文書がたくさん来ている。学校として取捨選択していくべきだ。大事なのは子供たちが充実したり、満足したりする場をどう作るかということだ。子供たちのことを考えて、管理職が指示をすることが必要だ。

○教職員の資質の向上では研修が大切であるが、高度な研修では即戦力にはならない。先生方の体験談を聞くなどの身近な研修は効果がある。体験談は真似ることができる。

○先生同士が向き合っている時間が少ない。パソコンには向かっているが会話がない。先生方が孤立しないように、風通しのよい職場づくりに取り組んでほしい。

第三分散会

《先輩出席者》

吉田　仁様　中川　實様

鬼澤　明様　鈴木　一司様

長澤　勤様

《学校長会出席者》

田邉　一男　酒井　孝行

江原　陽子　花園　浩

後藤　昌範　石井　誠二

寺内　雅美　鈴木　厚裕

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

先輩の皆様の教育にかける熱い想いがひしひしと伝わってきました。学校長会の会員一人一人が、先輩の皆様からいただきました貴重なご意見を、これからの学校経営に生かしていきたいと思います。

今後ともご指導のほど、よろしくお願いいたします。ありがとうございました。

経営研究

創意工夫を生かした特色ある教育課程

学校や地域の特性を生かした「生きる力」の育成

ひたちなか・津田小
小川　正一

本校は、ひたちなか市西部の住宅地に位置し、児童数五五一名の開校四〇年の中規模校（普一九・特二：情・知）である。津田の地域は、戦後の酪農開拓と昭和四〇年代の宅地開発により発展した地域である。このような環境の中での児童の「生きる力」を育むための特色ある教育活動（学力づくり、心づくり、体つくり、地域との連携の取組）を紹介したい。

一　学校の特性を生かした取組

学力づくりでは、算数科の授業研究で、自分の考えを数学的に表現できる児童の育成に取り組んでいる。学習指導案の低中高学年ブロックによる共同立案や学年プレ授業により、全学級が授業研究を実施する。学習習慣の定着のための「家庭学習の手引き」や主体的学習態度の育成のための「聞き方・話し方・発表名人」、ひたちなか市版学習指導の手引き「学びのきざはし」の活用を図っている。

心づくりでは、3つのあ（挨拶、安全、ありがとう）の徹底、ハッピースマイル運動、縦割り班活動（ロング昼休み、秋祭り）により、心の教育や社会性を育む活動の充実を図っている。

体つくりでは、全校運動（柔軟運動：宿題と各学期の柔軟検定、持久走・縄跳び大会）の充実、給食でのプラス一口運動、保健の自作啓発ビデオ・資料による指導により、体力と健康的な生活習慣の向上を図っている。

二　地域の特性を生かした取組

学校間では、幼保小（隣接施設との交流）・小小（相互授業参観）・小中（中学校区での学力向上及び生徒指導）・茨城大学附属特別支援学校（特別支援教育）との連携に取り組んでいる。

PTAとの連携では、朝のあいさつ運動（保護者全員、毎日六名一組）、登校班の一一〇番の家探検（安全指導委員会）、クリーン作戦（親子で参加、親父の会）、夏祭り（縁日、クイズラリー）を行っている。

地域連携では、高齢者との交流活動（ふれあい電話、敬老会：伝統文化クラブ・金管部、雛祭り：一年生）を行っている。

これらの取組により、児童の育成環境の総合的な充実を図っている。

「運動委員会による柔軟検定」

「分かる」・「できる」が実感できる学習指導の工夫
～ユニバーサルデザインの視点からの授業展開を通して～

常陸太田・誉田小
會澤　孝一

本校は、常陸太田市の巨峰ぶどう栽培が盛んな地域に位置し、児童数一三八名の小規模校である。

昨年度から国語科を中心に基礎・基本の定着と表現力の育成を図っている。そこで、本年度は授業の視覚化・焦点化を意識したユニバーサルデザインの視点を取り入れ、全児童が「分かった」・「できた」を実感する授業に取り組んでいる。

一　具体的な取組

㈠　「分かる」・「できる」が実感できる授業の実践を入れる

①課題提示と板書構成の工夫
（ユニバーサル的な視点を取り入れた色チョークの使用や具体物の提示等）
②学び合いの場の設定
（互いに教え合いができるペアやグループ学習の場面を入れる）
③思考の文字化
（自分の考えを表現する手立てとして、書く作業を入れる）

㈡　校内研修の充実

年度に一回以上の研究授業の公開と協議を実施している。その際、授業者の指導案を全員で検討するなど、学校全体で取り組む体制を重視している。

また、県立常陸太田特別支援学校から講師を招聘してユニバーサルデザインに関する研修を行い、授業力アップを図るとともに、特別な支援を必要とする児童への支援方法などを身に付けるようにしている。

㈢　その他の取組

①教育課程の工夫

週三日、朝の始業前の時間に「ステップアップタイム」と称して、管理職や養護教諭までが教室に入って、個別指導の充実に努めている。

②家庭学習の充実

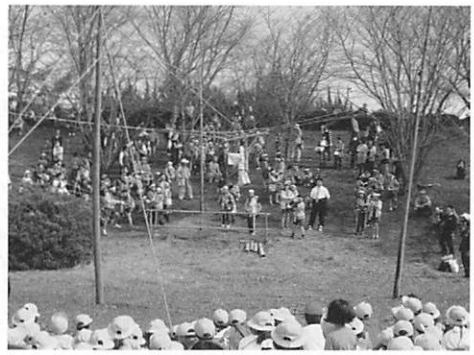
家庭学習の習慣化を図るために、家庭学習の時間や家庭学習の提出率を設定して、保護者と一体となった取組をしている。

㈣　成果と今後の課題

・授業のみならず、ユニバーサルデザインを意識した教室環境になってきている。
・課題研究主任や教務主任を中心に充実した校内研修が行われている
・単なる話し合いから個の思考にフィードバックできるようなペアやグループ学習への転換を図っていきたい。

郷土の伝統文化にかかわりながら学ぶ教育活動

つくばみらい・小張小
堀江　玲子



本校は市北部に位置し、つくばエクスプレスみらい平駅近くにできた新設小学校との分離に伴い児童数九三名の小規模校となった学校である。「小さくなっても元気な小張小学校」を合言葉に、地域の特色を生かした学習に取り組んでいる。

一　具体的な取組

四百年以上の歴史を持つ地域の宝、国指定重要無形民族文化財「小張松下流綱火」を題材とした学習についての取組

㈠　総合的な学習の時間

四年「小張の特色を調べよう」五年「綱火を知ろう。体験しよう。」六年「私たちの祭り　綱火研究」をテーマに学習に取り組んでいる。児童は、四年生から地域の保存会の方々に綱火について教えていただき、綱火の人形繰りを体験する。六年では、自分の研究テーマを設定し、地域の伝統や文化の特色を調べ、体験し、次代に継承していくための方法を考える活動を行っている。二月には報告書をまとめ「子ども綱火研究発表会」を運営し、プレゼンを行い、地域の方々や保護者に発表している。

㈡　音楽の授業

伝統音楽の指導については、学習指導要領で「我が国の郷土の伝統音楽に愛着をもつとともに、学校や学年の段階に応じ、指導の充実を図る」ことが求められていることを受けて、総合的な学習の時間の活動と音楽科の学習を横断的に位置付け、大太鼓・締太鼓・小太鼓・鉦・篠笛による「綱火繰り込み囃子」を学習し、地域の行事で演奏している。六年生の児童は、〝いよいよ自分たちが綱火のお囃子をやる立場になった〟という気持ちで、とても意欲的に取り組んでいる。

㈢　学校行事

四～六年生による綱火の人形繰りとお囃子は、運動会と小張秋祭りの行事で披露している。

二　成果と課題

取組の成果としては、研究の仕方やレポートの書き方を身に付けるとともに、地域の思いや願いを直接肌で感じたり、人と人との結びつきを再発見できたことがあげられる。今後、道徳で、「郷土愛」をテーマにした学習を予定している。地域と連携し、ふるさと「小張」への郷土愛を培うとともに、未来を切り拓く子供たちの礎となる、豊かな心を育んでいきたい。

地域の特性を活かした指導の工夫
～大村スタイルの授業づくりを中心に～

筑西・大村小
清水　博次

本校は、筑波山を東に望み、筑西市の南東部に位置する、児童二八五名の学校である。学区は市街地から農村部に広がっている。

特別支援学級に在籍している児童の他に、外国籍や、日本国籍であるが日本語指導が必要な児童もいる。様々な配慮や支援を必要であり、教育的ニーズは多様である。

一　実態を踏まえた取組

㈠　大村スタイルの授業づくり

①ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業

児童一人一人の特性とニーズにあった分かりやすい授業展開のため、授業のユニバーサルデザイン化（焦点化、視覚化、共有化）を推進している。

○焦点化：ねらいや活動を精選し、学習が深まる工夫

・授業展開の構造化

・発問、活動の焦点化

○視覚化：視覚、動作等を用いて思考につなげる工夫

・挿絵、写真等の活用

・身体を使う動作化

・整理された板書、掲示物

○共有化：一人の意見や考えを他の児童に伝え、学習内容の理解を深める工夫

・ペア、グループ学習による意見交換と思考の深化

②時間割の工夫

・朝全校読書で静かな始業

・帰りの会前の適用練習（ステップアップタイム）

㈡　地域の自然を生かした教育活動

筑波山を間近に望む、豊かな自然環境を生かす取組を進めている。児童の手による井戸掘りを行い、その水を利用した稲作体験学習や自然観察を行っている。また、大型水槽による地域の淡水魚の飼育、筑波山に生息する蝶を呼ぶ庭造りなどを進めている。

二　成果と今後の課題

授業改善の取組により、自分の考えを話したり書いたりする活動が活発化し、授業が分かると感じる児童が増えてきている。また、地域の自然を活かす環境整備を進めることで、身近な環境への興味・関心が高まっている。

今後は、授業展開の工夫をさらに進め、一人一人の児童の学力の定着を図るとともに、体験活動の充実を通して、郷土を愛する児童を育てていきたい。

市町村教育委員会と学校長会

県北　常陸太田市教育委員会との密なる連携について

常陸太田・太田中
桭村　毅

常陸太田市学校長会は、小学校一三校、中学校七校の計二〇校で構成されている。

本市学校長会は毎月定例の学校長研修会を開催し、市教育長をはじめ教育総務課長、指導室長も出席され、指導をいただくとともに、市の教育施策や事業の確認及び各種情報を提供いただき、各小中学校の学校経営が円滑に推進できるよう市教育委員会と学校長が連携した中で学校長会研修会を開催している。

常陸太田市は、市第五次総合計画「輝く人づくり」構想のもと、「常陸太田の未来を拓く人づくり」を学校教育指針とし、市教育委員会と学校長会が連携して、魅力ある学校づくりに取り組んでいる。その方針の基盤となっているのが、「夢育」である。

一　「夢育」を基盤とした学校づくり

市教委の指導のもと、「認め、鍛え、励まし、夢や志を育む」教育を全小中学校で実践している。この「夢育」とは、児童生徒一人一人が夢をもち、それを追い続けるための努力や工夫を、学校や家庭・地域が一体となって支援していく構想である。ただ「夢育」とは、児童生徒が漠然とした夢をもつだけでなく、学年や発達段階に応じて夢の形を変えるとともに、常に夢や目標を意識し、学校生活の中で努力を積み重ねていくことを大切にしている。そのために教職員は、保護者や地域と連携しながら、児童生徒一人一人の夢の実現に向けた支援を続けている。

二　人材育成・学力向上への取組

学校長会として、教職員の指導力の向上を目的とした研修を実施している。中でも学校長会の組織下にある学力向上推進委員会が主催する研修会は、市教委の指導と協力のもと、着実な実績を積み重ねている。この研修会には、各小中学校から若手及び中堅教員が参加し、年数回の合同研修を通して、各自の指導力向上だけでなく、市全体の今後の指導の在り方を求めて研鑽を積んでいる。今年度は各教科へのＩＣＴ活用に関する研修だけでなく、学力定着のための単元評価に関する研修も行っている。

常陸太田市学校長会は、常陸太田市子ども人権スローガン『「やさしさ」「ありがとう」でつくる笑顔の輪　大切なものは近くにある』を学校経営の根底に置き、「児童生徒同士、児童生徒と教師が信頼し合うあたたかな学校づくり」を通して、魅力ある学校づくりのため、市教委との連携をさらに深めながら、今後も努力を重ねていきたい。

県東　鉾田市教育委員会との連携

鉾田・舟木小
入江　洋一

鉾田市の学校数は、小学校二〇校、中学校四校、計二四校である。これに市立幼稚園四園が加わり、定例校長園長研修会を毎月一回開催しており、教育委員会からも教育長と参事兼指導課長が毎回同席し、講話や指導・助言をいただきながら、鉾田市教育の充実のための取組を進めている。

鉾田市は今年で市制施行十周年を迎えるが、市の規模に比べて学校数が多く、小学校の多くが単学級という状況にあり、当初から小中学校の適正配置が大きな課題となっていた。幾多の議論を経て、平成二四年には「鉾田市公立学校再編計画」が策定され、現在の小学校を一二年かけて中学校区ごとの四小学校に統合する計画が進んでおり、来年四月には最初の統合小学校が誕生する予定である。

鉾田市の学校教育の大きな転換期を迎え、本市校長会では、校長の行動連携と学校間の連携を深めることにより、学力向上他の教育課題への対応に努めている。

一　確かな学力の育成

・教育委員会が提唱する、課題解決型学習である「鉾田市授業スタイル」を全校で導入し、授業改善を図る。

・市主催による学力向上研修会の開催

・学びの広場サポートプラン事業の実施にあたって、中学生や高校生のボランティアの募集や派遣を校長会が行う。

二　豊かな人間性と健やかな体の育成

・「鉾田市豊かな心育成宣言」の四項目（名前で声かけあいさつ運動、早寝早起き朝ご飯運動、読書活動の推進、さわやかな汗を流す子の育成）を家庭や地域社会と連携して実践する。

三　中学校区単位の校長会の実施

・小学校統合を見据えた合同の宿泊学習や持久走大会、交流授業等の推進や幼小中連携活動の具体化を図る。

・市の小学校統合推進委員会が組織されている中学校区では、市の新しい学校づくり推進室や専門部会と連動し、統合に向けての各部会の進捗状況や課題について話し合い、方向付けをする。

本市校長会では、本年七月に初めての試みとして、教育委員会事務局の部長や各課長と校長会役員との懇談会を行った。これは、業務の軽減や予算面での現場の課題や学校統合を契機に見直しを要望したい市の事業について話し合うためのもので、予定時間を大幅に過ぎた率直な意見交換ができたと感じている。今後もこのような教育委員会との連携を基調に、学校教育の進展のために積極的な貢献をしていきたい。

特別寄稿

「新任教育長」として

坂東市教育委員会教育長
内桶　博仁

「愛（あい）から始まります」、「美女・ビジョです」、「ゆっくりと心にしみ込みます」。

ありふれたフレーズかもしれませんが、これらは、各種会議や様々なイベントの挨拶に際し、私が結びで言った謎掛けの、所謂、「その心」の一部です。

勿論、会議等の趣旨や内容、参加者などの違いにより、言わない場合が多いのですが。

「幼児教育」と掛けまして、「五十音」と解きます、その心は「愛（あい）から始まります」。これは、幼稚園の園長先生や教諭を対象とした研修会時のものです。また、「本日のママさんバレーボール大会」と掛けまして、「梅雨空の大雨」と解きます、その心は「美女・ビジョです」。これはバレーボール大会時のものです。

賛否両論、いや否定的な方が多いような気もしますが、私流の参加者の「つかみ」です。

さて、話は全く変わりますが、坂東市と秋田県能代市との教育交流について紹介いたします。

皆さんは「ライオン」について、どのような印象を持っていますか？「ライオン」の大きな絵を貼りながら、授業の冒頭に教師が問いかけました。

坂東市は市長同士のあるきっかけから、学力全国トップクラスの能代市との教育交流を昨年度から始めており、私自身、今年の六月に能代市の小・中学校を訪問し、授業を参観させて頂きました。

そして、八月には、初めての取組みとして、能代市から三名の教員を招き、当市の五年生を対象とした公開模擬授業や教職員向けの講演会を音楽ホール（ベルフォーレ）を会場に実施したところです。冒頭の「ライオン」は、公開模擬授業における能代市の教師の発問です。

能代市の教師と本市の児童は、もちろん当日が初対面であり、わずか三十分程度の打ち合わせの後、詩を使って「言葉の大切さ」について学ぶ国語の授業が実施されました。

「ライオン」の詩を手掛かりに、辞書を用いた対話型の授業により、子供たちが詩の中の一つ一つの言葉の解釈を深めることで、「ライオン」の印象を次第に変化させていく様子を授業で実践されました。

最初は緊張して声が小さく、手の上げ方が中途半端であった児童が、授業が進むにつれ、声が大きくなり、手も背筋もピンと伸ばし、積極的に授業に参加する姿は、正に圧巻でした。

教壇に立ったことがない私にとっては、授業の方法や授業者によって、子供たちの学ぶ姿勢がこれほど影響を受けることを「しみじみ」と感じ、教師の授業力の大切さを改めて実感させられた日となりました。

さらに、十月には改めて能代市を訪問し、今度は、坂東市の教師三人が能代市の小学校と中学校で、実際の授業をさせて頂く計画となっております。

二つの繋がりのない話をしましたが、校長先生方の中でお一人でも、何らかの参考にして頂ければ幸いです。

結びに、「子供たちに対する教師の愛情」と掛け、「高級ブランデー」と解きます、その心は「ゆっくりと心にしみ込みます」。お後（の方の準備）がよろしい（素晴らしい）ようで。

読んでみませんか

「貞観政要」のリーダー学
守成は創業より難し

著　者　守屋　洋
発行所　プレジデント社
笠間・笠間中　小池　浩一

唐の太宗・李世民は、中国四千年の長い歴史の中でも、屈指の名君として知られ、唐王朝の二代目として、平和で安定した社会を築くことに成功した。その治世を後世の人々は、太宗の年号を取って「貞観の治」と称えてきた。「貞観政要」は「貞観の治」をもたらした政治の要諦であり、その内容は、太宗と彼を支えた優れた家臣たちの問答集を中心に編まれており、その問答を通して、トップと部下たちの組織運営の真摯な姿勢と覚悟が余すところなく解き明かされている。

ここでは、「貞観政要」のなかでも、最も有名な「創業か守成か」を取り上げる。

創業と守成とどちらが難しいか。こう問われても答えにくい。なぜなら、創業には創業の苦しみがあり、守成には守成の難しさがあるからである。だからその答えは、その人の立場によっておのずから異なってくる。

早くから太宗とともに創業の苦しみを体験している、宰相の房玄齢が「創業のほうが難しい」と答えたのも当然であった。

一方、太宗の権力基盤が固まった後に、その人物を買われて敵陣営からスカウトされ、側近に登用された魏徴は、「守成こそ難しい」と思えた。それは、太宗の知遇に応え、太宗の治世を軌道に乗せようと、彼なりに頭を痛めていたからである。

思うに、創業も難しいが、守成も難しいのである。ただし、難しさの中身がずいぶん違っているのではないか。

創業にはこうすれば必ず成功するという王道はない。つまり、創業の苦心は、理解することはできても継承することはできない。これに対して、守成の心得はその気になればいくらでも学習可能である。

太宗は、「創業の困難はもはや過去のものとなった。今後はそちたちと共に心して守成の困難を乗り越えていきたい」とおもむろに語った。

太宗は、広く人材を登用し、彼らの諫言に耳を傾けながら、みずからは常に緊張感をもって政治に取り組んだ。

学校経営もこうでありたい。

梅のかおり

—先輩校長から—

退職生活雑感

前・小美玉市立
納場小学校長
谷津　秀城

月日のたつのは早いもので、退職後のただの普通のおじさんとして、質素な生活を夢見て、はや半年が過ぎてしまった。

四〇年間愛煙してきたタバコも禁煙。ハイブリッド車に切り替えての遠距離ドライブ。平日を活用した月四回程度のゴルフ。格安ツアー旅行の利用。古着活用の普段着交友。図書館を利用した読書などなど、質素な生活も心地よいものである。

退職後の「ただの普通のおじさん」としての夢見心地はなかなか難しい。退職してもなお、先生と呼ばれ、コンビニや祭り立ち食い見物などすれ違いざまに「校長先生だ。」と大きな声をかけられ、社会教育指導員として勤務している公民館では、高齢者の方々から孫が世話になりましたと丁寧なご挨拶と仕事への励ましの言葉をいただく。

見えないかかわりと見えない思いがたくさんあって、教育への大きな期待と温かい支援に支えられてきたかかわりが退職後も続いている。撒き続けてきた教育の心の種が息づく限り、見えないかかわりに気付き、感謝の気持ちを忘れない「素敵なおじさん」を意識した生活も忘れてはならないと思っている。

今日この頃

前・茨城町立
川根小学校長
中村　敬治

定年退職と勤務校だった母校の幕引きの日から、半年余り。

教員生活最後の年は、閉校式典行事の計画や記念誌の作成、統合小学校への準備等で、充実した、思い出多い一年でした。特に、全員からプレゼントされた卒業式では、涙が溢れるような感激を初めて味わいました。統廃合に伴う様々な課題は、全職員の奮闘努力と、地域並びに校長会の皆様のご支援で、概ね乗り切ることができました。ここに心より感謝申し上げます。

感傷に浸る間もなく、退職の翌日から児童養護施設の園長に就きました。園の児童は、町内の小中学校や近隣の高校に通学しています。私は、この子供たちの後見役として、前日までとは百八十度違う立場で、学校と関わることになりました。学校教育と児童福祉の領域には、様々な相違点もありますが、どの子供たちにも、自立した心豊かな社会人になって欲しいという願いは、共通するものと思います。

フルタイム勤務ですが、余暇を見つけ、歴史小説を読んだり、溜まった写真や手紙を整理したりしています。楽しみにしていた歴史探訪の旅は、もう少し先になりそうな今日この頃です。

育てる楽しみを

前・常陸太田市立
久米小学校長
梶山　豊昌

この三月、教職生活を無事終え定年退職することができました。在職中は、会員の皆様には大変お世話になりました。心よりお礼申し上げます。

現在は、常陸太田市立太田進徳幼稚園に勤務しています。園児たちとの会食、草刈りや樹木の剪定、花の水やりなど、充実した毎日を過ごしています。園児の活動では、御前田植え（水戸光圀公の田に苗を植える）、ヒップホップダンス、天神林太鼓など、地域の方々に支えられて、様々な活動に取り組んでいます。

退職して胡蝶蘭などの洋ランの栽培に興味をもつようになりました。何も分からない素人なので、本を読んだりインターネットで調べたりと、花を咲かせたい一心で試行錯誤しながら手入れをしています。肥料や水をやりすぎて根を傷めるなど、悪戦苦闘していますが、新しい花芽も育ってきてとても楽しみにしています。毎年、カトレアや胡蝶蘭・シンビジウムなどの花を咲かせられるよう経験を積んでいきたいと思います。

最後になりましたが、学校長会の益々のご発展と会員の皆様のご活躍をお祈りいたします。

楽しさを求めて

前・潮来市立
日の出小学校長
兼平　由美子

職を退いてから半年が過ぎてしまいました。今更ではございますが、在職中は皆様から多くのご示唆や刺激をいただくことができました。感謝の気持ちでいっぱいでございます。

自分の年齢と思いにどれほどの違いがあるのかも実感できずに、願いを果たしたいと計画を実行したこともございます。その中で私は、勉強することは面白いことなのだと改めて知りました。知らないことを知る、体験的裏付けにより思考を巡らすといったことが、いかに楽しいことなのかを実感できたことは、この半年間の私の小さな一歩でしょうか。忘れることが多いのは言うに及ばず、基が無いだけに思考の幅もスピードもありませんので、周囲の方々はさぞかし滑稽に感じていらっしゃったことでしょう。しかし、私が感じた喜びは尊く、更に続くであろう人生への導きでもあるのかと考えております。遅ればせながら『なるほど』と納得し、学校の教室で目を輝かせる子供たちの様子を心からうらやましく思う日々でございます。

規則正しい生活？

前・守谷市立
守谷中学校長
町田　香

たくさんの方々に支えられ、退職の日を迎えることができました。感謝の気持ちでいっぱいです。

退職して五か月が過ぎますが以前よりも規則正しい生活を送ることができるようになりました。三月までと同じように、毎日仕事に出ていることがその原因だと思っています。ラジオ体操の習慣もできました。毎朝六時半には、背筋を伸ばしてラジオの前に立つようになりました。長年悩んでいた腰痛も快方に向かい、継続の大切さを今ごろになって感じています。

七時半には家を出ます。教育委員会の指導室に机があり、学校訪問にも同行します。

私たちの仕事は、子供たちの成長の現場に直接関わることができる、しかも関わり方によっては、一人の人間をよい方向に導くことのできる崇高な仕事だと現職時代には話してきました。今の環境も本質的にはそうした状態が続いていると思っています。やりがいと責任を感じながら、与えられた仕事を頑張っていきたいと考えています。

高校野球から学ぶ

前・稲敷市立
江戸崎中学校長
糸賀　勝示

退職して半年、畑仕事と家屋敷の管理、合間に読書をする毎日を過ごしています。季節と共に変化する花や木、虫や鳥、今までと変わりない光景なのに、気付きや発見があります。「見ていたのに見えてなかった」ことに色々考えさせられます。

今夏の甲子園、鳥羽高校が勝利まであと一人という時に、主将でキャッチャーの梅谷君が外野手の小さな異変に気付いて主審にアピールしました。タイムがとられ外野手に確認の上、プレーが再開され勝利しました。心高ぶる時にナインのちょっとした仕草に気付く冷静さ、観察力に驚きました。彼の姿を自分に重ね次のことを思いました。

「校長の時、五感を十分に働かせて、もっと気付いたことや、細やかに気配りすることがあったのではないかということです。」

テレビを見ながらこのことを話題にすると、妻から次のつっこみが入りました。

「もっと五感を働かせてよ。○○の定位置は□□でしょう！」

「いゃぁ、見てないふりして、ちゃんと見ているのを目指していたら、本当に見えてないわ」とボケて逃げるしかありませんでした。今は、ボケ防止に五感をもっと働かせることに意を用いている日々です。

趣味と健康

前・八千代町立
安静小学校長
染野　昭彦

ある先輩校長から「退職後は趣味をもって楽しむことだ」とアドバイスされたことがある。私は今、その当時始めていた野菜作り（キュウリ・大根・トマト・スイカ・ネギ・タマネギ・ナス等）を失敗しながらも楽しんでいる。次は失敗をしまいと、機会があれば地域の方々から野菜作りのアドバイスを受けている。収穫した喜び、そして食べたときの食感は最高である。また、退職後に「そば打ち」も始めた。回を重ねるたびに、手順よく作れて、見た目も味もよくなってきているのが分かる。さらに、美味しいそばができるよう工夫を重ねていきたい。

健康維持にも気を遣っている。運動不足解消のために、退職後は、毎朝四五分程度サイクリングをしている。目が覚めると、サイクリングは億劫だと感じるが、始めてみると、とても気持ちがよく、清々しい気持ちになる。同じ距離でも次第に所要時間が短くなってきており、ペダルを踏むのも苦ではなくなってきている。以前と比べて足の筋肉がついてきていると思うと、うれしくなり、距離を少しずつ長くしている。

今後は、健康に配慮しながら趣味や旅行等を楽しみ、充実した日々を過ごしていきたい。

学び直しの日々

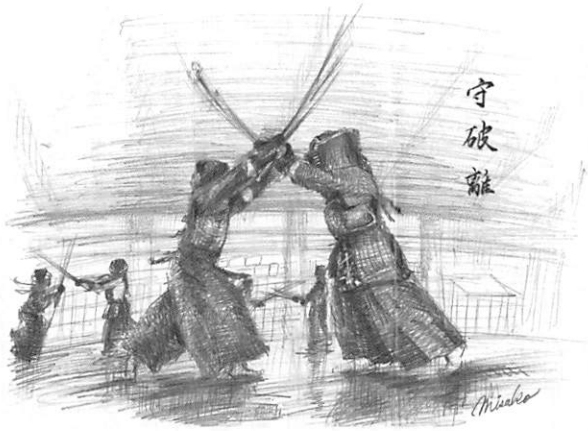
前・境町立
境第一中学校長
山中　康雄

三月の卒業授業で生徒に次の一節を紹介しました。「少にして学べば壮にして為すこと有り。壮にして学べば老いて衰えず。老いて学べば死して朽ちず」（佐藤一斎）。生涯学び続ける人になろう。

退職して早七か月を迎えます。生活の大きな変化とともに、在職中できなかったことを始めています。文学、特に古典の世界の探訪です。大学の講座から地域文芸サークルまで参加し、今まで知らなかった世界が、大きく広がっていることを実感しています。また、ＳＮＳ等により、多様な人たちとの交流も楽しみの一つになっています。秋の夜に「ひとり、燈のもと文をひろげて、見ぬ世の人を友とするぞ・・・」毎日、現職では味わえなかった出会いと広がる世界の中でゆったりとした日々を過ごしています。

現在、境町学校教育指導員として若手教員の研修等を主な仕事としています。若々しい感性とその未来を感じつつ、新たな時を重ね合わせ、自分の学び直しを人生の習慣として始めています。「今日という日は、残された人生の最も若い日である」という言葉を思いながら・・・。

ひばり



「守破璃」
つくば・豊里中　那須　美佐子

じまんの学校

ひたちなか・平磯小
佐藤　恵子

三〇年前、教育テレビで「たんけんぼくのまち」という社会科番組があった。働く人や社会の仕組みを主人公のチョーさんが地方のお店に居候し、イラストの地図で紹介する番組だった。シリーズ化され、那珂湊・平磯を中心に県内各所が紹介された。DVDとなった当時の映像を職員と視聴した。チョーさんと一緒に、全国の学校から寄せられた「たんけん地図」を教室に掲示する三年生の姿、校庭に五〇〇名の児童が、人文字で手を振る最終回の場面が映っていた。

当時の児童は、現在保護者になっている。平磯が舞台の番組があったことを児童にも知ってほしくて、早速チョーさんに不躾ながら手紙を書いた。すぐに平磯への思いがいっぱい綴られた手紙と、児童に「ずっと大好きだよ。」とイラスト入りの色紙が届いた。同い年のチョーさんは、今も教育テレビで体を張って頑張っている。児童には、中生代白亜紀層海岸での磯遊び、人情厚い平磯の人たち、海の見える坂の上の学校を、ずっとずっと大好きでいてほしい。

「地域」に感謝

常陸大宮・山方小
長岡　秀雄

早朝の散歩をしながら学校周辺のゴミ拾いをしてくださっている方。雨の日も風の日も子供たちの登校を見守ってくださっている方。感謝の気持ちを伝えると、異口同音に「自分の健康管理のためですから、気にしないでください。」という言葉が返ってくる。

学校には、読み聞かせ、草取り、図書支援、書写授業の補助、山小スマイルまつり体験講座の講師等、数多くのボランティアの方々が来校し、本校を支え、育ててくださっている。感謝の一言である。

本市は、「郷土でも輝くことのできる人づくり」をキーワードに『郷育立市』構想を掲げている。これを受け、本校では、地域で育てられた子供が地域貢献の意識をもち、地域を支える側に回るという「地域発展の循環」をつくる教育の実践を目指している。

地域の方々との様々な体験活動を通した交流と、地域の方々への感謝の気持ちを伝えることを目的とした「山小スマイルまつり」を十月下旬に実施する。

感謝の気持ち

常陸太田・里美小・中
黒羽　富子

冬の青空、布団干し・・。日本海側で育ち、茨城に嫁いできた当時は、これらに驚きと感謝で一杯になったものでした。

あれから三十数年を経た今も、冬晴れの日には感謝の気持ちが涌いてきます。しかし、最近は遠くにある故郷の冬の灰色の空が心の原風景として、鮮やかに蘇ってくるのも確かです。

今年度の定期異動により里美小・中学校に赴任しました。周囲を緑の山々に囲まれ、地域の期待を一身に受けながら、美しく整った校舎で教育活動を進めています。子供たちの大半は、幼稚園や保育園からずっと一緒で、家族のように温かい人間関係を築くことができています。「当たり前だと思う心に感謝の気持ちは生まれない」ある方から教えて頂いた言葉です。子供たちがこの恵まれた環境を当たり前だと思わず、周りのすべてに感謝しながら、一生懸命に生きていけるように教育活動を工夫改善していきたいです。そして、将来、この学校生活が温かくて豊かな思い出として蘇ってきてほしいと願っています。

ひまわりプロジェクト

鉾田・旭南小
江橋　惣一

夏の盛り、校庭周りに千本近くのひまわりが咲いた。児童会が主体となって「旭南ひまわりプロジェクト」として取り組んでいるものだ。

あの三・一一東日本大震災による原発事故で、福島県の富岡町から本校学区に避難してきていた姉妹がいた。姉妹の自宅は事故原発から五km地点の帰還困難区域にある。だから姉妹は事故から一度も自宅に帰っていない。

その姉妹が、この三月に福島県いわき市に転校した。その際に、姉妹から「福島ひまわり里親プロジェクト」を通してつながり続けようとひまわりの種が手渡された。それが本校のプロジェクトの始まりである。

子供たちが手書きでチラシやポスターを作り、家庭や商店などへ募金や種購入の協力を呼びかけた。ひまわりは学校内だけでなく、児童の家庭や地域でもたくさん育てられた。

ひまわりを通して児童同士がつながり、家庭や地域とつながり、福島とつながっていく。「つながり」を広げる活動の継続が、福島を思い支援し続けることにつながるのだとしみじみ思う。

「君のそばにここにいる」

牛久・中根小　長谷川　安男

『教えることなどできないかもしれない。教師にできることはただ子供たちの近くにいることだけである。そうすれば運がよければ子供たちに何かを伝えることができる。』

これは最近目にした茨大教育学部長、生越先生の論説の中にあった言葉である。映画「青い鳥」の主人公村内先生は吃音というハンディがありながら子供たちと真剣に向き合う。その姿は感動的だ。村内先生はたどたどしい言葉で、「本気で話すので、本気で聴いてほしい。」と子供たちに訴える。本気で聴くとはどのような意味があるのか考えさせられた。ちょうど同じ時期の岩手の中学生のいじめ自殺の報道ともあいまり、何度も何度も深く考えさせられた。

あの当該担任も何か変化があればその都度教育相談をしていたようだ。だが、子供の本気の心をとらえることができず、最悪の結果を招いてしまった。まずは寄り添い『君のためにそばにいること』そのことを子供たちに感じ取らせなければならない。このことは、教職員にも言えることだ。校長として、子供・教師のために『アイム・ヒア・フォーユー』（君のためにここにいる）を今一度しっかりと噛みしめ実行していかなければ！

朝刊の匂い

つくば・吾妻小　矢口　和子

朝刊を新聞受けから取ってくることが子供の頃のお手伝いだったからだろうか、朝刊の匂いが好きである。忙しい朝は、事件・事故のチェックで終わることもあるが、物事を様々なアングルから眺めたり、コラム欄から社会記事面には記載されていない事実を知ったりできるのも楽しい。インターネットで瞬時に情報を引き出すことができるが、新聞の真新しい匂いとともに得る情報は視野を広げる大事な手段であり、一日を新鮮にスタートさせるスイッチにもなっている。

八月、米寿を過ぎた父が転倒して入院した。新聞を持って毎日見舞った。無口であるが、新聞のスポーツ記事や政治のことが話題になると会話が流暢になる父である。退院できたのも少なからず新聞のお陰だと思っている。

先日本校で、新聞社から講師を招いた四年生の出前授業を行った。「見出しで内容が分かる」「逆三角形のように大事な事から書く」など、新聞の新しい発見に喜ぶ子供たちの姿が見られた。文字離れが危惧されている昨今、新聞の独特の新鮮さや匂いを子供たちにも肌で感じてほしいと願った瞬間であった。

いつでも夢を

結城市・城南小　塚越　敏典

「校長先生の夢は何ですか？」三年生児童からの質問にハッとしました。定年近くになる爺さんに、「将来の夢」ですか？。

最近仲間たちと、退職したら海外旅行がしたいとか、ゴルフをしたり、絵を描いたりもいいし、登山は無理でもハイキングぐらいはしたいね。などと話していますが、それは「将来の夢」などというものではなく、結局児童の質問には笑ってごまかし、「○○さんの夢は何なの？あそう。じゃあがんばってね。」と、はぐらかしてしまいました。

児童が校長室を去った後、「将来」などという概念が自分自身の中からいつの間にか消え去っていたことに気付かされました。たしか五〇歳の誕生日に、五十の手習いを決意し「英会話」を始めました。聞くだけで身に付くという誘いに乗って二年弱。長距離通勤を有効に利用したつもりでしたが、「聞き流す」の言葉通り、ほとんどを流出させてしまい効果なし。そして今日。児童の質問には即答できませんでしたが、六〇近くなっても将来の夢を語りましょう。「夢は、海外旅行先の洒落た酒場で、弾き語りをすることです。」これまで最も縁遠かった「楽器演奏」決心から早二か月。夢は叶えるものといいますが・・・。

心温まる親切

下妻・宗道小　落合　千鶴子

昨年、息子の結婚式場に向かう途中での出来事。電車を降りる際に、大切な友人から頂いたボールペンを床に落としてしまいました。それに気付いたのは電車を降りた跡で、ドアは閉まる寸前。「もうだめだ！」と思ったとき、私の前に座っていた三十半ば位の女性が、ホームにいる私の方を見て、ボールペンを拾って見せてくださり、電車の進む方を指差しました。ドアは閉まり、両手を合わせて「ありがとう」と拝む仕草をするのがやっとでした。早速、次の駅に電話してみると、ボールペンが届いているということでした。私は、その女性の優しさで、心がジーンと温かくなりました。

翌日、そのボールペンを受け取りに行きましたが、その女性は名前を名乗らなかったそうです。その女性は、次の駅で降りる予定ではなかったかも知れません。でも、見ず知らずの私のために届けてくださったのです。

今年四月、初めての校長講話でその話をしました。その後、六年生の担任が児童の感想をそっと手渡してくれました。その行為と児童の感想に、再び心が温かくなりました。相手の身になって、その人のために何かができる子供たちを育てたいと強く思っています。

編集後記

二学期開始早々の大水害。突然の出来事に驚く一方で、改めて自然の脅威を感じるところです。常総市をはじめ被災された地域、学校の皆様に心からお見舞い申し上げます。

おかげさまで、広報第二三三号を無事発行できました。ご多用の中、貴重な原稿をお寄せいただきました皆様に感謝申し上げます。また、私たち現役に叱咤激励をいただきました先輩校長の皆様のさらなるご健康、ご活躍を祈念いたします。